

「七夕（たなばた）」のはなし

※4年生の理科と関連です。

※興味があったら読んでみてね！

【七夕の日】

七夕は、7月7日に行う星祭りです。七夕には、一年に一度だけ「おりひめ（織女）」と「ひこぼし（牽牛）」が天の川の上で出会える日といわれています。

《七夕はいつから始まった？》

“なぜ、七夕が7月7日なのか”、“いつから7月7日になったのか”ということについては、よく分かっていません。七夕（たなばた）伝説は、昔の中国で生まれましたが、中国でも、漢代（～3世紀初め）の文献を見ても、七夕に関する記述はありません。3世紀ごろ（晋朝時代）になると、「二人が7月7日に会う」と、具体的な日が書かれている文献が登場します。このころから一般的になってきた可能性があります。

日本には、奈良時代に宮廷行事として伝えられました。そして、江戸時代になると、七夕はすっかり一般の人達の行事として広まりました。

《七夕伝説とは？》

天空でいちばんえらい神様「天帝（てんてい）」には、「織女（しょくじょ）」という娘がいました。織女は神様たちの着物の布を織る仕事をしており、天の川のほとりで毎日熱心に機（はた）を織っていました。遊びもせず、恋人もない織女をかわいそうに思った天帝は、天の川の対岸で牛を飼っているまじめな青年「牽牛（けんぎゅう）」を織女に引き合わせ、やがて二人は結婚しました。

結婚してからというもの、二人は毎日遊んで暮らしていました。織女が機を織らなくなったので、神様たちの着物はすりきれてぼろぼろになり、牽牛が牛の世話をしなくなったので、牛はやせ細り、病気になってしまいました。

これに怒った天帝は、二人を天の川の兩岸に引き離してしまいました。しかし、二人は悲しみのあまり毎日泣き暮らし、仕事になりません。かわいそうに思った天帝は、二人が毎日まじめに働くなら、年に1度、7月7日の夜に会うことを許しました。

しかし、7月7日に雨が降ると、天の川が増水して渡ることができないので、カササギが二人の橋渡しをします。（一説によれば、たくさんのカササギが翼を並べて川に橋を架けるそうで、とにかく2つの星の出会いは、この鳥なくしては成り立たない、というわけです。）

これが、私たちがよく知っている七夕の伝説です。



カササギ

【理科的検証 しよくじよ けんぎゆう ～織女と牽牛は一年に一度出会うことができるのか～】

日本では織女のことを「おり姫（おりひめ）」、牽牛のことを「彦星（ひこぼし）」と呼んでいます。織り姫はこと座の1等星「ベガ」で、彦星はわし座の1等星「アルタイル」です。明かりのあまりない暗い場所では、2つの星の間に天の川が横たわっているようすを観察することができます。

七夕伝説によると、年に1度、7月7日の夜に会うことができる織り姫と彦星ですが、当然のことですが、星が実際に移動することはありません。

地球からベガまでの距離は25光年、アルタイルまでは17光年です。（1光年とは光が1年かかって届く距離のことで、約9兆5千億km）そして、2つの星の間のじっさいの距離は15光年ほど離れていて、これは、光のスピードでも約15年かかってしまう距離です。

つまり、織女と牽牛の二人が光のスピードで移動したとしても、1年に1回会うことは、とても無理なのです。（夢をこわしてしまって、ごめんなさい。）

☆ 星はとてもきれいです。星座早見盤で星座を探したり、星座にまつわる神話を読んだりして、夏の夜空を見上げてみてください。プラネタリウムに行くのもいいですね。

※ 夜の観察は、お家の人と一緒にね！



ベガ（右上）とアルタイル（左下）と天の川